

母娘で楽しむ日本舞踊

週末の朝、まあるく部屋を掃除して、いそいそと身支度を始めます。

冬の間にもう一度袖を通そうか、それとも立春も過ぎたし、お気に入りの白大島に塩瀬の帯と桜色の帯締めにしようか、脱ぎ着しながらあれこれ迷うのも楽しい。自ら「独り細雪、ごっこ」と称する至福の時間です。時間と整理整頓にうるさい主人は、半ばあきれながらもこのときばかりは何となく機嫌が良さそうです。「洋服で似合う色と、全身を包む着物で似合う色は違う」と、カラーコーディネートーターをしているママ友から以前聞いたことがあります。男性なら、スーツの生地や織り方で顔映りが違うことに気づかれるかと思いますが、着物の場合は、同じ色でも縮子ちぢこと縮緬ちりめんでは、袖を

通してみるとスツと顔に映える感じが全く違うことに驚きます。

最近では、グレー、ベージュを基調に3色でまとめるといった色づかいが着物でも好まれていたため、男性のスーツ姿が大変参考になります。着物と帯の柄合わせや帯揚げ、帯締めといった小物の色合わせは、スーツ、ワイシャツ、ネクタイの合わせ方と似ており、ちらりと見える長襦袢の袖や八掛（着物のすそ裏）の色合わせは、さながら靴下の色合わせやコート裏地のお洒落と同じといえるのではないのでしょうか。

先日、ストライプのスーツにペンシルストライプのワイシャツ、斜めストライプ柄のネクタイを上手に着こなした方を見たときは、思わず「やるなあ」と感心してしまいました。



加藤 尚美

松戸市役所総務企画本部人事課

【かとう なおみ】日本大学法学部卒業。小学校3年生より日本舞踊を習い、中学生で名取となる。藤間流、藤間種繪師範の門下生として鍛錬をふむ。家族は公務員の夫と中学生・小学生の2人の娘との4人と、介護状態のゴールデンレトリバー、黒猫、トラ猫、すぐやる課で拾った兎がペット。独身時代は、インド、ベトナム、エジプト、モンゴルなど、海外旅行を趣味とした。最近では日舞と、スポーツジムで行うベリーダンスに夢中。いつか、白無垢、綿帽子姿で「鶯娘」の舞台上に立つことが夢。

着付けについて

着物は洋服と違い、できるだけ寸胴の体型に補正して着付けをします。独身時代は、わざわざ寸胴の体型にするため、さらしをあてたり、ウエストにタオルを巻いていました。色々な着付けの便利グッズを試したこともありましたが、今や貫禄のついたウエストは何もしなくても寸胴となり、悲しいかな補正も不要です。手の抜き方を覚えた今では、普段着の名古屋帯なら15分もあれば着付けができるようになりました。ミセスの雑誌には必ず「着物」の特集がありますが、ある意味、理にかなっていると思います。

私は小学校3年生から始めた日舞を現在も続けています。お稽古の日は、着物



芸者姿で踊った『舟揃え』

を着付けながら私が自分の世界に入っていると、一緒に通っている次女は、器用に半幅帯を蝶々に結び、祖母の形見の半纏はんてんをコート代わりに自分でさつさと身支度を済ませ、草履を履いています。

長女は、お稽古場近くの図書館が大好きで、一緒についてきてはお稽古が終わるまで本を読んだりしています。

母は、私の着付け方に一言文句を言いながらも、着物を着て娘たちと出かける姿をうれしそうに見送ってくれます。

着物の楽しみ

高級ではありませんが、我が家には代々受け継がれてきた着物があります。「絹は蚕の命と引き換えた布だから、端切れまでも無駄にしてはいけない」と幼い頃に

母から教わり、私も娘にそう伝えていきます。

それに、祖母の形見や母の若い頃の着物をまといながら、当時のエピソードを聞くのは楽しく温かい気持ちになり、どんな高価なものにも代え難い大切なものと感じます。

私の場合は、小柄なことも手伝って年配の方から着物をいただくことが多く、いただいた着物姿を写メールで送ると、帯締めや帯留めの色づかいのアドバイスをくださるので勉強になります。袖を通すたびに縁のある方の人となりを重ね、自分も素敵に年を重ねたいと感じます。いくつになっても、そんな思いを馳せる



私が中学1年生の時に踊った『俄獅子』

ことができるのも、着物の良さかもしれない。

先日は、縞の着物にインドのサリーを帯に仕立てたものを合わせてみました。独身時代、インド旅行で訪れたカルカッタの街並みの喧騒をなつかしく思い出す大好きな一枚です。

最近反物を買って、海外縫製や着物専用ミシンで仕立てることもできます。実際にはインターネットで見ただけで買ったことはないのですが、ワンピースほどの手軽な価格でした。日本の化学繊維は一流ですから、自分のジャストサイズに仕立てた化繊の着物は、雨模様ときでも気軽に着られることができ、とても



娘は国立劇場で『関のこまん』を踊りました

便利です。ポリエステルウォッシュアップのスーツが、仕事着として一枚あると重宝するのと同じかもしれません。

そもそも仕事を持つ身では着物はどんなに頑張っても週末しか着ることができないのですから、着倒すつもりでいれば、充分楽しめるのではないのでしょうか。

ある夏の暑い時期、私の着付けの先生は、ビーズの襟と袖だけついた長襦袢の上に着物を着てみえたことがありました。女性の略式礼装用とされる訪問着のドレスコードは外すことができませんが、普段着の着物は、気負わずにもっと気軽に楽しんでいいのかなと思っただけです。

娘が、私の妹の20年前のお下がりの浴

衣に三尺帯を締めて浅草へ出かけた際に、外国の方から「素敵なプリントね。どこで買ったの？」と呼びとめられました。カラフルできれいな花柄の浴衣姿の女性が多い中に、麻の葉模様の着物を着た子供は目を引いたのでしよう。

「麻の葉は成長が早く、丈夫で真直ぐに育つことから、子供の産着などに用いられるおめでたい柄です。色々な人と繋がりを持てますように、という親の願いも込められているんですよ」と、そんな古典柄の言われを外国の方に伝えたかったのですが、恥ずかしながら「サンキュー」としか言えなかったのが残念でした。

発表会に向けて

私が通っている日舞のお稽古場では、踊り初め（新年会）や浴衣ざらいといった、区民センターでパイプ椅子を並べただけの小さな発表会がいくつもあります。

小さいとはいえ、人前で発表するとなれば、熱の入れ方も変わってきます。つくづく、人に見ていただくのが上達する秘訣と感ずるときです。特に、孫弟子（弟子の弟子）も一緒に発表会するとき、私には10年間のブランクがあるといつても、古くからの弟子としてしっかりと踊らなければ、師匠に恥をかかせてしまうというプレッシャーがあります。でも、それがあるからノンビリ屋の私でも努力する

のかなあと思っています。

今年の踊り初めで、私は『岸の柳』を踊ることになりました。この演目は柳橋芸者が片思いの相手を思う内容ですが、新橋、向島、神楽坂など花街によって踊り方も変わるということを先生に教えていただきました。色気を出すために団扇や手ぬぐいといった小物を使うのですが、その扱いにはてこずりました。

うれしいことに日舞の世界でアラフォー（40歳前後）は、若くて色気のある一番良い年齢だそうです。しかし、浴衣は体型がそのまま出してしまうので、背中の肉がぼつりついた後ろ姿ではいただけないと頑張つて3kg減量しました（その後すぐリバウンドしましたが…）。

娘が踊った『手習い子』は、寺子屋帰りの町娘が花道から鮮やかな着物姿で登場し、道草をしたり、蝶々を追いかけてりする様子を描いた古典舞踊で、初心者なら誰もが習う基本の型が随所に入っている演目です。

もつとも娘はそんなことは構いもせず、可愛らしい黄八丈のお引きすりの着物（歩くと引きずるような裾の長い着物）を着せていただき、目がハートになっていました。

普段は、

私「宿題やった？ 忘れ物ない？」

娘「うん。やった」

と言うくらいで、ろくな確認もしない



娘は黄色いおひきずりの着物でご機嫌。
子供には厳しい警察官だった義父も
孫になるとにっこりです

私ですが、踊りとなるとこのときはやはり口うるさくなります。

「中指の指先に力を入れなさい。手先が綺麗に映るから」「おへその上から、身体を伸ばしながら半身をねじるとすつきり見えるわよ」など、我ながらえらそうです。

そんな注意をされながらも、娘にとって日舞のお稽古はうれしいことが5つあるそうです。

①お稽古の往復の間、私と2人だけいられる（年子の妹にとって、母親を独り占めできる至福の時間とのこと。手をつなぎながら、学校のこと、姉や従姉妹との喧嘩、1週間分の出来事を

色々話していると、往復2時間程の道のりもあつと言う間です。私もいつまでも手をつないでくれるのかなと思いが、今を楽しんでます。時々、柴又帝釈天まで足を延ばし、お団子を食べるときもあります。

②おいしいお菓子をいただける（お付き合いの広いお師匠さん宅には、珍しいお菓子がいつもあり、実は私の楽しみでもあります）。

③綺麗な着物が着られる（向島生まれで、宝塚歌劇団の娘役として活躍されたお師匠さんは、舞台衣装の払い下げではあるものの、練習のときからその演目に合わせた衣装を着けさせてくださるので、お引きずりは裾さばきが難しいので、ありがたいし、気分も上がります）。

④子猫と遊べる（我が家にもトラ猫1匹をいただき、柴又生まれなので、寅次郎と名づけました）。

⑤神谷バーに行ける（娘は浅草公会堂の帰りに「どこに食べに行きたい？」と尋ねると必ず「神谷バー」と答えます。将来のんべえになりそうで心配です）。

本人は、上手になりたい欲はなさそうですが、お風呂の中で「牛に水くろうて〜ヤットンヤットンヤットン」と『相模蟹』の歌を鼻歌で歌っていたときは、振り付けを早く覚えるコツは曲を

覚えることなので、シメシメとほくそ笑んだものです。

プリキュアの衣装を欲しがった小さな頃の延長なのか、家でも浴衣を引きずりお姫様気分に浸ったり、料亭ごっこなのか、和食を作ると着物を着て、主人と長女をお客様に見立てて、お品書きまで揃え、いそいそとお運びをしたりすることもあります。着物の所作に慣れることは日舞の上達の秘訣ですから、自分からそうしてくれることはうれしいものです。

結局、「好きこそものの上手なれ」のことわざどおり、興味を持ち楽しんでやることは、無意識に上手になる秘訣だなぁと気づかされた一場面です。

いつか娘と競演してみたい気持ちもあります。私にとって日舞は好きというレベルを越えており、娘を教えるより自分のことに夢中になってしまいそうな気もして躊躇しています。日舞については、母としてよりも「ライブ」の気持ち優先してしまうのかもしれませんが。

**日本舞踊を通じて学んだこと。
そして、娘に伝えたいこと。**

そもそも私の両親は、活発な妹の方に日舞をさせたかったようですが、妹は水泳の選手となり、すぐにやめてしまいました。私は、読書が好きで運動神経を妹に全て譲っていました。日舞のテンポ

娘は新年会で、先生が七つの時の着物をお借りして舞台上に立ちました。この着物は震災から逃れた貴重な一枚



と非日常的な世界に夢中になりました。

もつとも、学生時代は他に楽しいこともあつて通っていただけであり、本格的にお稽古するようになったのは、役所に勤めるようになり自分でお月謝を払うようになってからかもしれない。

舞踊を身につけるだけでなく、お師匠さんが家元や姉弟子（先輩）に接する気遣いや立ち振る舞いは、職場や窓口で人と接するときにも勉強になりました。

ある文化祭では、舞台上に立つ前に私たちの社中だけ、広い舞台の中でスポットライトが綺麗に当たる場所や踊る位置の確認をしました。

「どんな上手な絵も、額縁からずれていたら、美しくないでしょう？」

お師匠さんのこんな緻密さや、芸に対して妥協をしない真摯な姿勢も、仕事を持つ身には学ぶものがあります。

また、季節の行事を大切にされ、七夕の頃には笹の葉を玄関口に置き、その言われをお話くださる姿は、家庭を持ち母となったとき、役に立ちました。

また、お師匠さんは、盆踊り大会や老人ホームへ門下生を挙げてボランティア

に参加したり、「日本の伝統芸能を子供たちに伝えたい」という思いから小学校で指導されたり、誰でも気軽にできるように裾野を広げようと努力されており、その姿に舞踊家の女流名人であると同時に、サラリーマンである公務員（ご主人様は警視庁にお勤めでした）の妻としての姿も見え隠れし、親しみを感じます。

こうして振り返ってみると、芸の素晴らしさはもちろん、お師匠さんの人柄こそが私が長年にわたり日舞を続けることができた理由かもしれません。

娘が学校の宿題で『平家物語』や『論語』の暗唱をしているとき、「子曰わく、四十にして惑わず」と言うたびにドキリとさせられます。のんびりとマイペースな20代、子育てに追われる30代を過ごしてしまつた私は、今になって迷うことばかりで、「孔子の時代より長生きだから迷つてもいいよね？」と自分を慰めているのです。

どの世界であつても、その道を極めた方の姿勢は学ぶべきものが多いですが、迷える40代にとつて、教えを請う方に出会えたことに感謝の一言です。

大学で危機管理戦略を専門とする主人には、「特定の分野でしか使えない真理は全ての真理ではない。日舞のことはわからないけど、先生の下で学ぶことは、仕事にも通じる大切なことがたくさんあ

るから、ご縁を続けなさい」と言われました。

とんびに油揚げを取られ、追いかけたら、すつてんころりと転ぶ：という場面から始まる『子守』という演目の練習中に妊娠がわかり、あわててお休みをして出産し、子育ての間、遠のいていた日舞ですが、こうして娘と同じ趣味を持つことができ、とても幸せです。

うれしいことに、姪も日舞を始め、扇子を手にながら「要返し習つたよ。できる？」と娘と語り合う姿はほほえましいものです。反抗期の娘&姪も、踊りのことだけは、私に一目置いてくれるようです。

子供は、わが子に限らず可愛いものです。だから可愛いうちに、伝統ある雅な世界の中から日本人として知っておくべきものや、心の中の引出しを増やすことができるように伝えていきたい。躰とは、「身」が「美しい」と書きますが、幼いうちにぜひ身に付けてほしいと心から願っています。

楽しい、綺麗というだけで入りこんだ道は、どうやらとてつもなく深く、抜け出せそうもありません。しかし、この険しい道を娘と一緒に進むことが、生きがいだと思えてきた今日この頃です。